

特集にあたって②

診療報酬制度から考える薬剤師の役割

医療がますます高度化・多様化するなかで、薬剤師の役割は大きく広がっています。今や薬剤師は、単なる調剤にとどまらず、薬物療法の最適化、チーム医療への参画、地域との連携、そして患者さんの生活の質（QOL）を高める支援まで、幅広く医療に貢献しています。

特に病院や診療所では、高度急性期から回復期、在宅への移行、さらには慢性期医療に至るまで、それぞれの医療機能に応じた薬学的支援が求められます。例えば、高度急性期や急性期では迅速かつ専門的な薬物治療管理が不可欠であり、一方、慢性期では服薬の継続支援や副作用のチェックなど、患者さんの生活に寄り添う役割が重要になります。患者の状態に応じた適切な薬学的介入を地域全体でシームレスにつなぐことが、医療の質と安全性を支える柱となります。

しかし現状では、これらの専門的業務の多くは、診療報酬制度において十分に評価されているとは言い難く、評価されていない業務は「見えない貢献」として埋もれがちです。そのため、薬剤師の真の価値が社会に正しく伝わっていないように思います。薬剤師の活動が医療にどう貢献しているのかを、診療報酬制度にきちんと反映することが、職能の社会的認知につながるのではないのでしょうか。

日本病院薬剤師会では2026年度診療報酬改定を見据え、病棟薬剤業務のさらなる評価、薬剤師外来の制度的位置づけ、薬薬連携の強化、そして在宅医療の展開のなかで薬剤師の役割拡充を求めていく予定です。これらは単なる報酬の増減ではなく、医療提供体制の質的向上と持続可能性を左右する重要な制度設計の一環といえるでしょう。

本特集では、診療報酬制度の内外にある薬剤師業務の価値を多角的に捉え、「何が評価されるべき業務なのか」を報酬という視点からあらためて考える機会となります。現場の薬剤師の声と、制度設計に関わる方々の意見が交わることで、薬剤師職能の未来像がより鮮明に描かれることを期待しています。

武田 泰生

日本病院薬剤師会 会長